

鳥海イヌワシみらい館通信

Vol,36 2020年 秋号



鳥海イヌワシみらい館
マスコットキャラクター
「ワッシーくん」



バードウォッチングへの誘い③④ 野鳥と絵画②
蜂蜜の森から⑭「牧羊神パーンの葦笛」

「コクガン」7月酒田市 撮影：齋藤修

野鳥と 絵画 ②

前回、先人が描いた
絵画作品に加えて、野鳥を描くことの
意義について紹介いたしました。
2回目は芸術の秋に、
美術館バードウォッチングの際の
注目すべきポイントをおさえながら、
より深く野鳥絵画を楽しむ
方法を紹介します。



太田 大仙子
「きゅうり畑・チャボ」
鶴岡アートフォーラム 所蔵

構図

「ピラミッド構図」を使い、きゅうりの支柱が三角形に配置されることで、見る側に安定感を与える構図になっています。余白をつくることで雑然とした印象をなくし、伸びた竹やトン

ボなどを入れることで、無駄なく季節感を加えた作品になっています。三角形の構図の中にチャボの親子が動きまわる姿が描かれており、ひとつの画面に静と動が表現された作品です。

作品のどの位置に、どのような大きさで、何を配置するのかは、
絵画の印象を決める大切な要素です。



絵のなかに描かれた様々なモノには、目で見てわかる情報や元来備わっている意味合いとは別に、なにか特別な意図が込められている場合があります。それは描かれた当時の歴史観や価値観にもとづくものであったり、画家の認識や考えを主張するものであったりと様々です。

今井 繁三郎
「無題(少女とハト)」
今井アートギャラリー 所蔵

シンボル (象徴)

山 形県鶴岡市出身の洋画家、今井繁三郎はハトを題材にして多くの作品を描きました。この作品は少女にハトを加えることで「純潔性」を表現しているといわれています。また、ハトは、古くから平和の象徴として表現されてきた歴史があり、作品には従軍画家として戦地に赴いた作者の平和に対する思いが込められています。

技法、時代、作者、

例えば日本画には、円山四条派、琳派、狩野派などいくつかの流派が存在しており、描かれた時代の流行など作品の背景を知ることによって、絵画をストーリーとして楽しむこともできます。



徳川 慶喜
「花鳥画(ギンムドリ)」
公益財団法人致道博物館 所蔵

円 山応挙、伊藤若冲など名だたる日本画の巨匠たちの作品は、まさに見るものをあっと言わせる力強さや緻密さなど、魅力に満ちた作品が多いですが、こちらの素朴な水墨画は、最後の将軍徳川慶喜による水墨画作品です。描かれたのは明治期になってからですが、戊辰戦争が終結し、華族

となった徳川慶喜はカメラなどにも興味をもち、晩年を趣味に費やしたといわれています。ギンムドリは当時、稀な迷鳥だったと考えられますが、作者の絵画作品から当時の環境や時代背景をも想像し、読み取ってみるのも面白いですね。

専門家の視点から 野鳥絵画の 見方について

鶴岡アートフォーラム 学芸員
武川 あおい氏 | Takekawa Aoi

美術を鑑賞する際は、絵をみた人それぞれが、自由に自分の思うままの感想や意見をもってもらえればと思います。太田大仙子のチャボの絵は、実をつけたきゅうりとチャボの親子が描かれた夏らしい表現ですが、例えば元気な葉と枯れた葉と一緒に描かれている部分を見て、「秋が近づいてるんだな」と思う人もいれば「人間の栄枯盛衰になぞらえているのでは……」と考察する人もいます。どちらも間違いではなく、何かを感じ取ったり、思いついたりすること自体が絵を鑑賞する醍醐味です。

絵として表現された鳥は、絵画の技術的なセオリーや画家の意図に沿って描かれているため、実物に即した姿であるとは限らず、誇張や省略、美化がなされている場合があります。自分が知っている野鳥の絵をみる際は、その鳥の外見についてわかっている特徴と絵の表現が同じかを確かめてみたり、逆に、絵をみて気になる特徴があれば、そのあとに実際の鳥を観察して確認してみたりすると、自然と美術双方のより深い理解につながっていくのではないかと感じます。

庄内の動物情報コーナー

豪雨被害、台風の接近などまさに我慢が続いた今年の夏～秋シーズン。山形県ではブナの実の凶作も影響し、市街地までも連日ツキノワグマが出没している状況です。ラニーニャ現象の発生もあり、冬も気を抜くことができません。各地の自然情報を moukin@raptor-c.comまでお寄せください。



2020/7/3 「ハチクマ」 遊佐町
絶賛子育て中のハチクマ！地面に降り立っているという事は・・・そこにきっとご馳走があったに違いない？
撮影：渡会様



2020/7/3 「ハイタカ」鶴岡市
ここはオオタカの生息する池が見下ろせる立ち枯れの木。なわばりに入っていることがばれないうちにそーっと立ち去ったようです。オオタカチャレンジというやつかもしれません。
撮影：清原純哉様



2020/7/24 「ササゴイ」 鶴岡市
市の中心部にある鶴岡公園では、コロナ禍の中人知れずササゴイの幼鳥がすくすくと育っていました。
撮影：なおちゃん



2020/8/4 「メスグロヒョウモン」 鶴岡市
名前の通りメスのみが黒っぽい色をしたヒョウモンチョウ。奥をとぶ「別種か？」と見まごうばかりのオレンジが鮮やかなチョウが、オスのメスグロヒョウモン。オスなのにメスグロヒョウモンと呼ぶことに若干抵抗あります。
撮影：たっちん様



2020/8/4 「カワセミ」 鶴岡市
周囲がからからに乾燥しているからでしょうか、翡翠色が岩に映えますね。暑いから川でひと風呂浴びますか！？
撮影：たっちん様



2020/8/13 「ヤマナメクジ」 酒田市
思わず何かの糞かなと大変失礼な感想を持ってしまったこと、深くお詫び申し上げます。10cmは超えていると思われるこのナメクジは、翌日にはいなくなっていました。食べられた？
撮影：本間憲一

全国の動物情報コーナー



2020/9/8 「コウノトリ(3羽)」 酒田市
今年の春に兵庫県と福井県で生まれたヤングな子たちのようです。エサの少なそうな用水路を大きなくちばしでつつきながら歩いていたそうです。手前のアオサギが「見ねえ顔だな・・・」撮影：渡会様



2020/9/22 「キタヤナギムシクイ」 酒田市
酒田市の離島、飛島の9～10月は秋の渡りのシーズン。多くの小鳥や猛禽類たちが中継地として訪れます。
撮影：とし様



2020/7/30 「カオジロトンボ」 秋田県
シオカラトンボ、ノシメトンボ、マイコアカネ奥深きトンボの和名の中で、ドストレートに「顔白」。「公家トンボ」とかひねると認知度が上がったかも？（分布領域の問題です）
撮影：たっちん様

イベント開催報告

○「夏休み体験プログラム」

8月1日(土)～16日(日)「夏休み体験プログラム」を開催しました。

今年は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、予約制とし、体験会場で人が密にならないようにエリアを分けて開催しました。

学校の夏休み期間も例年に比べると短かったようで、主に地域の小学生たちが利用してくれたようです。7月より有料義務化となったレジ袋の影響もあってか、エコバッグ作りがとても人気でした。サーモンフライ小物作りは、フライフィッシングで使う「毛鉤」をアクセサリにしようというもので、野鳥の羽を使って、「フライ＝虫」に似せた毛鉤をストラップやピンブローチにしました。フライタイイングで実際に使う道具を使って、英国紳士になったつもりで体験してもらいました。

来場してくれた皆さんありがとうございました。



○「イヌワシと猛禽類の秋の渡りを見よう！」

9月12日(土)観察会「イヌワシと猛禽類の秋の渡りを見よう！」を開催しました。

講師は野鳥講師として猛禽類保護ネットワークの伊藤智樹さんと、ジオパーク講師として認定ジオパークガイドの五十嵐和一さんに解説していただきました。

当日は東の風が強く、観察にはシビアなコンディションとなりましたが、開始早々猛禽類の飛翔が確認できたことで参加者のボルテージも一気に上がります。伊藤さんからはなぜ猛禽類が渡りをするかや、鳥海山でのイヌワシの保護の歴史についても解説していただきました。強風の影響もあってか、全体的な渡りのカウント数は多くありませんでしたが、目の前を飛翔してくれた猛禽類もありました。ジオパークについても五十嵐ガイドより面白おかしくお話をいただき、参加者もその話術に引き込まれていました。鳥海山の成り立ちや、各ジオサイトにも興味を持っていただけたようです。この観察会は鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会との共催で開催しました。この特異な環境が、イヌワシをはじめとする猛禽類たちにとって大変重要で欠かすことのできないことを理解していただけたのではないかと思います。参加してくれた皆さんありがとうございました。

この日見られた鳥:ハチクマ(11羽)、ハイタカ属(2羽)、ハヤブサ(1羽)、トビ(1羽)、ミサゴ(2羽)、イヌワシ(2羽)、ノスリ(1羽)、アマツバメ、イワツバメ、ツバメ、ウグイス、ホシガラス 計12種(猛禽類7種)



目の前を通過した「ハチクマ」

○「シルバーウィーククラフト体験教室」

9月19日(土)～22日(火・祝)シルバーウィーククラフト体験教室を開催しました。

秋の4連休を利用して自然素材を使ったクラフト体験をしていただくということで、夏に人気のあった「ハンドクリーム」と「エコバッグ」を作ってもらいました。ハンドクリーム作りではエッセンシャルオイルの香りをブレンドして楽しんでいただいたり、エコバッグ作りでは夏とは違う季節の進んだ時期の葉っぱを利用した雰囲気のあるバッグを作ることができたと思います。

来場してくれた皆さんありがとうございました。

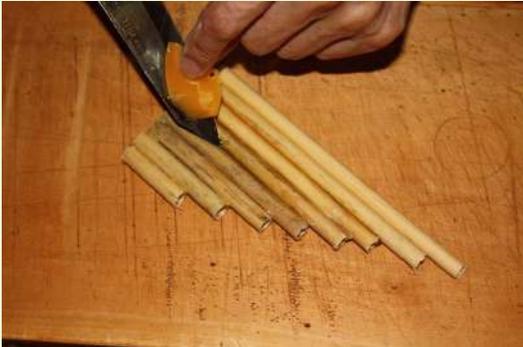




蜂蜜の森から

第15回「牧羊神パーンの葦笛」

山形県朝日町で蜜ろうそくの制作を通して、自然のすばらしさを伝えている安藤竜二さんによるコラムのコーナー第15回目です。蜂蜜の森を通して私たちが暮らす環境を見つめなおしてみませんか？



熱したナイフで蜜ろうを溶かし接着する



完成した葦笛「パンパイプ」



初めて蜜ろうを使ったのは、ギリシア神話の牧羊神パーンだといわれています。醜男のパーンはシューリンクスという美しいニンフ(妖精)を見初めていて、たまたま森の小道で出会ったときに言い寄ろうと近づきました。怯えたシューリンクスは風のように逃げ出し、ラドーン川に飛び込み、川に棲むニンフたちに「私の姿を変えて、パーンの魔手から守ってください」と頼みました。パーンがシューリンクスをとらえたと思った瞬間、彼女は葦の葉に変身してしまいました。

パーンはその葦の葉を何本か切り取り、それを蜜ろうで付け合わせて笛をつくり、シューリンクスと名付け、いつも持ち歩き吹き鳴らしていたそうです。

長さの違う管を束ねて作る笛のことを「パンパイプ」と呼ぶのはパーンの名前が由来だったのです。

本当に蜜ろうで固定できるかを試してみました。溶かした蜜ろうは、熱いうちに付けるとしっかりくっつき、ぬると剥がれる性質があります。葦は想像以上

にしっかりと固定され、振り回しても外れることはありません。それどころか、手で強引に外そうとしても剥がれませんでした。

葦が細いためか、作りが雑なせいかかすれていい音色は出ませんでした。でもなんだか思いを伝えられなかったパーンの寂しさは十分伝わってきた気がしました。



安藤竜二 (あんど う りゅうじ)
1964年生まれ。養蜂を学んだ後1988年に、日本ではじめての蜜ろうソク製造に着手。ハチ蜜の森キャンドル代表。NPO法人朝日町エコミュージアム協会副理事長。アシナガバチ畑移住プロジェクト主宰。編著『朝日岳山麓養蜂の営み』(朝日町エコミュージアム研究会発行)



Illustrated by Masami Tsuno

©鳥海イヌワシみらい館

普及啓発担当

今年秋の鳥海山、本当に木の実が少ないと感じます。昨年までセンター周辺もアケビや山葡萄、ブナの実など多かったのですが、今年の少なさといったら...あくまでもセンター周辺に限ってですが... (本)

希少種保護増殖等専門員

食欲の秋☆私の血液が天然キノコ(マイタケ、ブナハリ、ナメコなど)山栗、川ガニを欲しています!! 芋煮もサイコー♪(長)

事務局

クマ10頭捕獲(10/5現在)、イノシシの被害もあり、収穫の秋は危険な秋?(後)

鳥海南麓自然保護官

うちのスタッフが今までに撮りためた猛禽類の写真を紹介するコーナーを設置しました。見に来てください!! (澤)

編集後記&施設情報

鳥海イヌワシみらい館

10月~12月の開館情報

開館時間・・・9:00~16:30

入館料・・・無料

休館日・・・12月より毎週火、年末年始

臨時休館日はホームページにてお知らせします。

ホームページアドレス : <http://www.raptor-c.com/>

<https://www.facebook.com/Raptoreagleraptor>

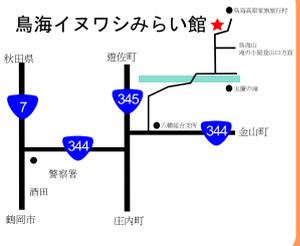
猛禽類保護センター

〒999-8207

山形県酒田市草津湯ノ台71-1

TEL 0234-64-4681 FAX 0234-64-4683

E-mail: moukin@raptor-c.com



鳥海イヌワシみらい館通信
Vol.36 秋号

発行: 猛禽類保護センター活用協議会
(事務局 鳥海イヌワシみらい館内)